

女子教育論雜載

(一) 梅花女學校の設立を祝す

天父我を愛すれば我人を愛し、人も亦我を愛す、是れ萬物の靈と稱ふる人たるものゝ本分なり。惜哉吾人已に惡に陥り、其の本分を失ひ反て其愛に敵たり、然りと雖も天父は反て敵を愛す、故に吾人復た天父と和ぐを得たるは何ぞ夫れ幸の甚しきや、然るに未だ其洪愛を感悟せざる者は天下の半に過ぐ、嗚呼嘆ずるに堪ゆべけんや、天父は猶ほ之を罰せず復た之を愛門に招き罪門を脱せしめんとす、嗚呼何の喜びか之に堪ゆべけんや、即ち日夜その恩恵に浴し、夙に其洪慈を感悟したるは余輩をして天下未だ其愛を知らざる無數の兄弟を先導して天下の愛門に入らしむるは當然の務也、然れば則ち余輩、天父の愛意を奉戴し懃勉事に従はざらんや。

或日我同志の兄弟愛によりて凝結したる梅本、浪花の兩會發論して曰く、男子の事は今こゝに置いて論ぜず、愛を培養するの本は世の婦女子に關する大なり。其の婦女子を培養するは愛なる女學校を設立し、愛種を以て婦女子なる田に蒔に如くはなし、余輩宜しく茲に志を注がざるべけんや、夫れ人たるものは婦人より生れ、其の教育を受け其の性を習はざるものなし、故に愛に由り養育すれば愛となり、惡により養育すれば惡となる。之當然の理なり。然れば婦人は文明開化の基礎とも謂ふべけんか、母愛あれば子愛あり、子愛あれば天下の人は母より生れざるもの無ければ天下の人愛あり。

天下の人愛あつて國家文明の域に趣かざるの理なき論を待ずして明かなり。

泰西の學士嘗て言へるあり、文明開化の基礎は婦人の心にあると、又誣言にあらざるを信すべきなり、兄弟果して以て如何となすや言未だ終らざるに諸兄弟姉之を誥して曰く、善き哉言やと於是其の設立の方法を論じ、其計算を定

め、遽に事に従へり。然るに會員僅かにして金力薄乏なれども幸に天父の愛佑に依て遂に今日其功を奏するに至る、此校は則ち梅本浪花兩會の協力に依て設立する所なれば其校名を稱して梅花女學校と云ふ、弟伏て惟みるに今日諸姉の勉勵に依り、今日如此の成功あるは豈に天父吾等を顧みるの徴にあらざらんや。

天父我を顧みずんば吾等何ぞ愛心あらん、學校何ぞ今日の功を奏せんや、天父我を助けば愛豈に慶からざるの理あらんや、愛校豈に盛ならざらんや、諸姉姉悦よや、勉めよや。

(梅花女子専門學校・梅花高等女學校「創立六十年史」) 明治十一年五月

(二) 太平洋航海中の所感

吾人は吾地球に乗て、一秒時七里餘の速力を以て縦に進行し、一時間五百五十八里の速力を以て、横に動揺すると雖も、已に吾人は其習慣性を受けたるが故に、更に之を覺ゆることなし。余輩十三名の日本人、客月十六日横濱より、瀛船ペンキ號に乗り込めり、船の長さ二町に満たず、乗込人二百に足らずと雖も、日本人あり、支那人あり、以太利亞人あり、西班牙人あり、英人あり、米人あり、上等社會あり、下等社會あり、鳥類あり、畜類ありて、自ら數社會を作して、一小世界を代表せり。暫時にして此小世界は、軌道を定めて進行を初め、其速力僅に一時間十二英里半、横に振動すること一秒時一尺に充たず、然るに吾同胞人は、僅に三名を除くの外は悉く注船病シロシツツに侵れ、其苦痛甚しく、重病人の如く寢床に伏し、殆ど三晝夜間、立たず、食せず（然れ共四五日を経て縦横動揺の習慣性を受け、各々平常に復し、終には大怒濤を見て却て愉快を感じるに至れり）余も亦其苦痛者の一人にて、三日間病床に臥し居たるが、此雜多の感慨交々吾心裏に浮び、殆んど制すべからず、何ぞや曰く日本人の小さきと、弱きと、貧きと是なり。それ此行の船客は、日本人十三名、西洋人十二名、支那人十名にして、船子は合計百三十五名、内米人三十八名、支那人九十七名なりしが、米人は尤も身體肥滿し、大且つ高く日本人は比較的尤も身小さくして、且つ短く、注船病にかゝりし者も、日本人のみにして、他は平氣なり、而して上等室は、建野全權公使一族を除くの外は、悉く西洋人之れを占め、下等室は支那人、日本人にて充つ又此船中労働者の賃金を尋ぬるに、西洋人は月給二百五十弗より四十弗に至り、支那人（多くは人足業）は二十五弗より十五弗を受く、（日本程賃銀の低き國なきと思ふべし）彼等の労働に、耐へ且つ節儉に注意するは非常にして、貯蓄に熱心なる有様を察するに、吾日本民の及ぶ處にあらざる者の

如し。余は此仲間に入り、此を見彼を思ひ、如何にも日本人の貧しく、身體の小さく、弱きか（殊に學生）を目撃し慨歎措くこと能はざるなり。

於是忽ち吾思想に浮出たる者ありて、大に吾精神を鼓舞し、吾をして欣喜雀躍に耐へざらしめ、恰も吾頭上に鬱積したる黒雲を、吹き拂ひたる心地せり、是れ實に吾日本固有の長處を認めたるなり、夫れ日本は、恰も有爲活潑の一年の如し、今尙ほ幼稚なりと雖も、確固不拔の精神に富み、一の大望を懷き、將來天下を呑むの一大英雄たらんとするものゝ如し、今已に小學校を卒業せしが、其進歩如何を視よ、政事、文學、教育等は如何、鐵道、電信、工業は如何、實に進歩の速かなる、世界第一の神童と萬人より稱呼せらるゝにあらずや、之より進んで中學大學を卒へ、終には老古の歐米と競進を試みんとするものにあらずや、實に其目的の高尙にして、遠大なる、豈支那朝鮮に比すべけんや、余思茲に至て忽ち眉聞け、初めて茫茫たる太平洋を眺め、吾心を延すを得たり。

然れ共又茲に憂慮の情を惹起す者あり、曰く此神童の身體虛弱なれば、或は中途にして倒るゝの慮なきや又貧乏勝なれば、學資に窮し、十分其才力を延すことを妨げられざるや、是れ尤も危ぶむべきものなれば、之れを救ふの方を講じ、これが豫防を爲さざる可らず。

夫れ之れを救ふの第一策は、人種を改良するにあり、人種改良を實行するは、第一婦人に適當の教育を與へ、第二早婚の弊を矯むるにあり、吾日本人の矮小なる、素より種々の原因ありと雖も、其中、尤も重なる原因として算すべきものは、早婚なり、又余前述せし如く、此船中現在の舟子、米人は三十八人（壯年以上）の中妻を有するもの僅に七人なりと謂ふ、余一米人に問ふて曰く、汝は何故に未だ妻を有せざるやと、彼答へて曰く、余十分の財産を貯へて後ち妻を迎ふべしと、此れ米國一般の風にて、彼らが婚姻を重じ、十分成長の後、子女を養育するの貯を爲し、初めて結婚するが故に、其人種の強壯なるを知る可きなり、又余或支那人に、汝妻を有するやと問ひしに、彼答て曰く、余

は三人の妻を有すと、而して語を續いで曰く、吾支那に於ては、家を建て妻子を養ふに十分の金錢を貯ふるときは、幾多の妻を有することを得、然れども金錢を貯へざれば、一婦をも娶るを得ずと、數婦を娶るは蠻夷の風語るに足らずと雖も、財産の數をもて、婚姻に制限を付るが故に、自ら早婚を禁止するの結果を生ずるが如し、然るに吾日本に於ては、未だ乳臭き少年も、子女を教育する資力なきものも、自由に婚姻するを得るのみならず、却て之を榮譽として行ふが故に、十分發育せざる人類多く生ずるに至るなり、殊に慨歎に堪へざらしむるものは、學生の微弱なることなり、豈之れを教導するの師父、之れを矯めずして傍觀すべけんや、故に余は法律に依り、或は教導により、男女十分に成熟し、且つ子女を教育するの力量を得るにあらざれば、決して婚姻す可からざるの國風を、養成することの、尤も緊要なるを感ずるなり。

第二策は國を富ますにあり、

現今我日本は、人口年々に増加すと雖も、資産力は却て之れに逆比例をなすもの如し、之れを救ふの方、一にして足らず、或は下等人民に、金儲けの機會を與ふること、或は租税を輕減し、或は殖産工業を盛んにする等、枚擧に遑あらずと雖も、余の卑見を以て之れを見れば、今茲に大活潑なる運動をなし、之れを挽回せんとするには、從來の引込主義を全廢し、廣く世界と競争を初むるにあり、今迄吾國は、外國と行通を絶ち、常に家庭に蟄居し、安樂に生活をなしたるも、今は電信、汽船、汽車等の便により、外國の隣家とはなりたれば、外國と競争するの止むを得ざるのみならず、吾國の如く土地狹隘に、人口繁殖し、從て賃銀増々下落するの有様に至りたれば、廣く活眼を世界に開き、商業家は世界を相手に商賣し、農業者は世界の原野を開墾し、學者は世界の學者仲間入りを爲し、以て萬國と競争するの覺悟なかる可らず、然れば大に之が爲に刺激を受け、勇氣千倍、憤激事に従ひ、終には吾國に大商業家も出づべく、大豪傑も出づべく大富豪家も生ずべく、大學者も生ずべけん。

同感の士よ、教育により、政事により、宗教により、文により、口により、以て早婚の弊を矯め、人種を改良し、亦吾四千萬の人心を導ひて、世界の廣きに向はしめ、十分吾國前途の成長發達を計られんこと、切望に耐へざる也。

〔女學雜誌〕二百五十二號 明治二十四年二月

(三) ウエレズレー女子大學觀察略記

(ウエレズレー女子大學は、米國に數多ある女子大學中、最大なる者の四の中の一なり。社友、成瀬君細かに之を觀察し其實況を左の如く報道せられたり。)

余は當國ウエレズレー女子大學より招待イニテリコンを受けるの榮に遭ひ、去る四月十三日より一週間校内に設けたる、頗る整理せる客室に、滯泊して、日々教員生徒同様の特權プリビヂを有し周密なる觀察を遂ぐるの便を得たり。今其概略を記さんに、

設立、 本校は今より十五年前デュラント氏なる人の設立せしものにて、當國に於ける女子大學(男子大學と同等の學科を授る校)の權輿なり。デュラント氏は其最愛の一子を失ひ、大に感ずる處あり、莫大の資を投じて、其校設立に着手し、一時に土地三百エーカー、(五三二六萬五千四百坪)を購求し、自ら監督して、校舍を建築し、凡ての附屬品、書籍器械を備へ、準備全く成りて開校せしに、開校するや否、直に三百名の入學生あり、其より年月と共に成長し、今日に至れり、現今生徒總員七百名、九棟の大廈巍々として雲間に聳へ、理化學室、書籍館、美術學校、音樂校に至る迄、萬端完備せざるはなし。

位置、 余が彼地に至りし日、着せしは午后三時頃なりしが、瀛車を下り、停車場より數丁計緩歩して、校に達し、其の庭内に入り、暫く足を止め、眼光を放て四面の光景を見渡すに、地は平坦ならずして、無數の丘陵を成し、周圍三英里の湖水ありて、其中央に位せり、此日天氣朗にして、鳥は樹間に轉り、草は綠を吹き、鏡の如き湖面萬象と映して其景色得も言はれず。時に數多の生徒各々日課を卒へ、或は互に手を携へて庭内を逍遙せるあり。或は草に

横り、或は石に倚りて息へるあり。或は丘に登るあり、谷を降るあり、若くは湖水に舟を浮べ、又絶壁に臨んで遠景を眺望せる杯あること見たり。此時余は思はず胸中に叫びて云へり。嗚呼是れ實に余が平素理想的の女學校位置たるなりと。

清潔、七百名の青年女子の集へる場處なれど、何れの校堂に至り、何れの寄宿舎に入るも、隅より隅まで、清潔に且つ美麗なるは、余の感嘆して止まざる處なり。中にも教員會議室の如きに至ては、裝飾燦爛、殆ど目を眩せしむる許なり。板間の如きも拭き掃除行届き、光澤を發する程になり居るものから余は一の大失錯をなせり、即ち余は一日ストーンホールと稱する堂に入るや、帽を掛んとして誤て足を失し顛覆したり。

教授法、は講義レクチャー、自脩、問答、等の法を用ひ自發、自動、的の方針を取るもの、如し。故に教師は簡單緊要なる講議をなし、其綱領と參考書及研究の方法等を委しく生徒に示すのみにて、生徒をして書籍館ライブラリー（十二分の書備で生徒の需用に應ず）或は器械室に至り各々研究實驗を遂げ、己の説を立てしめ、然して問答日に當り各自研究、實驗ラフゼーションの結果を演述せしむ。中にも理化動植物の如きは、生徒各々試験すべき物品と器械を與へられ、其觀測、實驗する處を一々圖に畫き、説明を附して、提出せり。余は教授時間の様子を一々參觀せしが、生徒の答辨は實に明晰にして、又綿密周到なりき。

女子の智力、教員は教授インストラクター十四名助教教授五十餘名（悉く女子）なるが或は歐洲ヨーロッパの大學を卒業し、學士、博士、の學位を有せるあり、或は當洲の數個の大學を卒業せるものもありて、哲學、心理學、數理學、理化學、等の講義に至ても十分明晰に、深遠なる學説を述べ、且教授の仕方も丁寧、敏捷、を極むるを見。又一方には生徒問答も中々深遠高尚なる理論に涉れるを聞き、實に女子の進歩を驚嘆せり。余は斯る結果を實際に目撃して、女子の頭腦は男子のものよりも少く、其智力は男子の智力に及ばざるや否やの、疑問殆ど消失せるが如き感覺を起したり。

女生徒之風俗、男子同等の學識を有するこの七百有餘の女生徒、及六十有餘の教員女學者の女風を目撃せば、如何なる偏見の人も、女子に學問を爲さしむれば、なまいきになり、男らしくなり、粗暴になる、との感想を消散すべし。余は一週間此校に客となり、日々數多の女教員、女生徒の待遇を受け、また常に三百名或は二十、三十、の女生徒、教員と食を共にせしが、其丁寧親切なる、其謹慎柔和なる更に無學の謙遜女子と異なるを見ず、否却て無學なるものに優るを覺へたり。殊に其舉動の規律正しく、衣服頭髮の整理したる、實に女風の發育を見るに足る。尤も中には僅か一二の威張た風、高慢なる舉動を見受けたれども、併し斯る女は、假令無學なるも、矢張其通りの女にて、學問したる爲め斯くなりしにはあらずと、余は信ぜり。又余は寄宿舎の内情を探らんと欲し、女生徒、取締、扨に種々内幕を聞質したるが、生徒間競進の念はあるも嫉妬心の如き情は絶て無きが如し。最上級なる四年生は自ら思想も高尚に希望も遠大にして少しく威光アッテを有するが如き様なり。世間男子大學新卒業生を、學者馬鹿など、評することあれども、學問したる女子も之に類する迂濶者になる弊ありや、余は殆ど之を知らず。

能辨術、身幹四肢の動作、呼吸器の使用法、發音の鍛鍊、等凡て能辨術に必要する脩業を教授せるは、矢張り女教員にて、已に五十の峠を越へたる活潑なる老婆なり。隨分熟練したるものにて、感服したる點少にあらずと雖も、嘗て男子学校にて見たる男子教員の老鍊家と比較すれば、稍劣りたる様感じたり、素より四肢の使用法にまれ、發音の工合にまれ、女子の能辨術は自ら男子と異なる處ありて、其天然に従ふて尤も能く發音せしむるを勤むるを主とす可れば、一概には比較し難し、又この習鍊の結果か、或は他の原因かは明に定むる能はずと雖も、余は該校の禁酒會に臨み、生徒數名の演説を聴聞したる時、其音聲七百名の耳朶に達するに十分の力ありて、思想も明亮に聞取らるゝを覺えたり。此禁酒會の會員は悉く女生徒女教員なるが、或は拍手、喝采し或は花にて製したる褒典、を與る等のことなりて、中々熱心に満ち、隨分盛なりき。又余は是迄時々婦人の説教演説を聴き、男らしき嫌あるを見當りし事もあ

りしが、當夜の女生徒の演説中には、かゝる見苦き風體言語を毫も發見せざりき。

德育、 は全く基督教の信仰を以てす、毎朝講堂に於て聖書朗讀、禮拜、讚美等の式を施行し、生徒は殘らず出席して、最と嚴肅に式を守れり、又た日曜日毎には、何れの宗派を問はず、地の遠近を論ぜず、有名なる牧師を、方々より招きて、説教を委頼せり、余の在留中は、彼の有名なるボストン市のヒリップ、ブルークスの説教ありたり、又六十餘名の教員は、常に生徒の間に雜居し、食堂の各テーブルには、一二の教員あり、各種集會にも生徒間に教員の散在しあるを見たり、如是生徒教員の間に親友の情保たれ、自ら家庭の風を養ひて、不識、不覺、教員の感化生徒に及び其品格を薰陶せり。

體育、 校内空氣の流通自由自在に度を節するを得、溫氣にしても、冷氣にても、意の如く引入るべく、寒暖計にて一定の溫度を計り、講堂に、假令聽衆充滿するも、萬人一様に新鮮の氣を吸ひ得るの構造あり。食物は生理的、化合物的の學理に合ひ、一の批難す可き點を視ず。其他體操を初め、運動、洗濯、沐浴、等に止る迄、一として衛生方に適はざるはなし。然れども、本校の一大缺點と思ふものは、他にあらず、生徒の餘りに學事に偏し、體育を怠る事他。

即ち其弊として批難すべきもの三あり、そも其内の二弊は、極少數にして、一般本校の風儀といふを得ざれども、其一は割合に腰の小さき事なり。中には實に嘔吐を催すべき程小き者ありと見たり。是米國の習慣、遺傳等にも因する事なるが、失張り「コーセット」の爲す處ならんと察す。尤も教員等は悉く其弊を明知するが故に、之を教戒し、其多數は「コーセット」を用ゐる共、身體發育を妨る程、之を結束するものはなき由。又其二は時々學生の中に耳環を掛たるを見ることなり。第三即ち最大の弊といふ可きものは身體運動の足らざること也。この弊は獨り女子にのみありとは謂ふ可らざれども、女子は男子の爲さざる餘計の注意を身體の裝飾、室房の整理に要し、常に心を靜にして勉學に傾くる故三育の平均を失するは事實也と察せらる。是れ米國女子教育の改良す可き要點ならん乎。然れども女子高

等教育は體育に害ありとは、余決して信ずる能はず。前述の弊は、必竟平衡の宜を失し、一方に偏したるより生ずる弊害なれば、若し之を平均せしめば、智育は却て體育を助るは論をまたず。殊に余は六十餘名の教員の體格にも注意したるが、其多數はよく肥満し、全部十分發育したるを見、智育が女子體育を害するとは、實際にあらざるを感じた。尤も六百餘名の生徒にして其身體發育を察するに、腰の外は多數は十分發育し、日本青年女子に比すれば、遙に勝りたることを覺ゆ。又余の滞在中病床にありし者は僅に二三名なりし。

教員の輿論、余は多の問を發し、諸教員の經驗、所見を聞きたるが、其中本校の輿論と云ふ可きものゝ、一二を擧げん。女子職務の範圍、は男子の範圍と異なる處なきとの説にて、其理由とする處種々ありき。又男女混交教育、の主義を賛成し、種々の結果を擧げて、之を證せり。併し余は未だ之に一致するを得ず。

洗濯所、余が滞在中手拭、シート、等は一度用ゆれば直に之を取替へて洗濯する故、余は洗濯所は何處にあり、又七百名の生徒は如何に洗濯するやと訝り居たるが、漸く最後の日に至り、洗濯方を視て其意外なるに驚き入りたり。日本の女子が足袋一足洗ふに手の皮を剥く程磨するが如迂遠なるものにあらず、蒸氣機關（此機關の作用の及ぶ處廣く冷水、温湯、暖氣、等を各室に送る事より、其他百種の働を爲す）の一部の席にて洗濯機械（其一局處を押せば）自ら運轉して其中に滿る洗濯物を洗ひ、また他器に移せば清水にて精洗し、全く純白となる、而して之を乾すには、亦一室ありて高溫度を保ち之に入る時は、亞弗利加の熱帶地方へでも入りし感あり。故に大氣の晴雨に關らず、常に定則通に洗濯するを得可きなり、又之を熨するも、其一端を器機に狭めば、直に之を仕上げて他の一方で押出す也。

それ米國にては八百屋、紙屑買に至る迄、馬車を驅て、商賣し萬事萬端物質界の力を使用し、一人の人間が千人の仕事を爲す、大勢然らしむる所也。余は之を思ふ毎に吾國の人足の憐むべきを嘆じ、一日も早く人力を馬力や、風力

や、氣力、の代りに使用するを廢止し、人間が機械と物質力を使役するの地位に進まんことを願ふて止まざるなり。吾人が人力を用ゐて文明國に競争せんとするは恰も人力車に乗て瀛車と競進を試むるが如し、愚も亦甚しからずや。

〔女學雜誌〕二百六十七號・二百六十九號 明治二十四年五月・六月

(四) 日本女子大學校設立之趣旨

明治二十七八年の役は宇内を震蕩し帝國をして世界強國の一たるの實を顯はさしめたりと雖も、是れ單に帝國が世界の舞臺に立て天の使命を演ずるの開幕たるに過ぎざるのみ。此の美麗なる山河と高潔なる歴史とを有する帝國がその任務を完ふするの前途尙ほ遼遠にして、遂行すべき事業打破すべき障碍尠しとせず。畏くも上

聖天子戦後の國家經營問題として國防・殖産及び教育の三大事業に軫念を勞させ給ひ、億兆亦聖意を奉體し鞠躬奮勵維れ日も足らざるの觀あり。普通教育に於てもその影響する所頗に活氣を添へ來りしと雖も、獨り女子教育に至りては之れが發達普及の策を講じ、以て上

聖天子の大御心を奉載し、下國民の開發進暢を謀る者寥乎として聞ゆるなきは、抑も女子の教育するに足らざるが爲め乎、將た女子教育の結果目前に顯然たらざるによりその必要を認知せざるが爲め乎、兎にも角にも是れ寔に聖世の一大恨事にあらずや。夫れ女子は國民の一半を組織する者にしてそが隱約の間に社會に及す影響の深且大なる豫想の外にあり。されば女子教育の振否は邦家汗隆の由て岐るゝ所なりと謂ふも決して過言にあらざるなり。是れ吾人が敢て世上の志士仁人に訴へ茲に大阪に地を下し、日本女子大學校なるものを設立し女子教育の改善普及を催進し、以て國運振張の一助に供し國恩の萬分一を報ぜんと欲する所以なり。吾人豈に徒に蛇足を女子教育界に加ふる者ならんや。聊か吾人の確信する所の教育上の主義方針及び方法を實地に應用して以て日本女子教育の發達を促がし、邦家の進運を助けんとするの衷情切なるが爲めのみ。請ふ此の主義方針及び方法等の大略を陳述し、吾人の赤心の存する所を吐露するを得せしめよ。

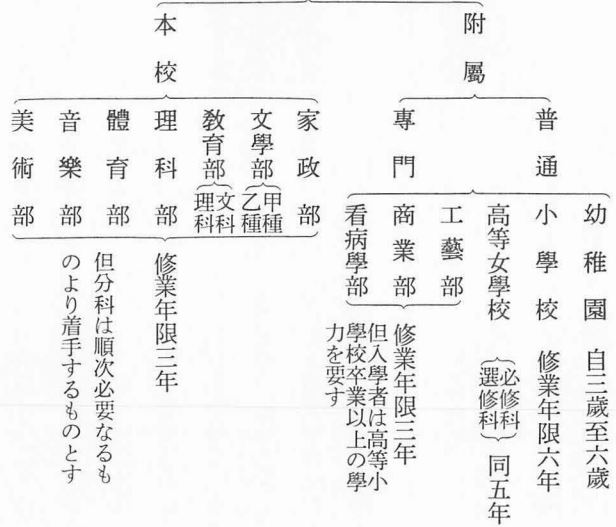
一 主義方針

吾人が執る所の教育上の主義方針たるや第一に女子を人として第二に婦人として第三に國民として教育するに在り。熟々世上の女子教育法なる者を見るに往々女子を器械視し若くば藝人視し、隨て目前實用の知識能を授け、更に人たるの教育に注意せざる者の如し。吾人は信ず。此の人たるの教育は管に普通教育の主眼たるのみならず、専門教育に於ても亦最も注目すべき要點なりと。抑も人たるの教育とは心身の能力を開展せしめ圓滿完備の人となし、品械に非ず又藝人に非ず優に高尚有爲の人となし、如何なる境遇に處し如何なる職業に従ふも人として必ず缺くべからざる資質を脩養せしむるを云ふ。而して是れ女子教育上必須の要素なりと雖も未だ其至れる者となす可らず。心身の構造及び社會の組織上よりして女子には女子の盡すべき自然の天職なるものあり。その主要なるものは即ち賢母良妻たるにあり。而して此の賢母良妻たるは決して容易の事にあらざるなり。試に日本將來の賢母良妻たる者の資格とすべきものを擧げなば高尚の女徳、鋭敏の智力、強健の身體及び相應の藝能を備ふべき是れなり。吾人は此の方針に向て殊に力を用ふる所あらんことを期す。斯の如く女子に人たるの教育と女子たるの教育とを授けなば女子教育は完成せるもの、如き觀あるも決して然らず。夫れ女子も亦國家の臣民なり宜しく國民たるの觀念を與へ明晰なる國家的意識を懷かしめ英米佛獨の女子に非ずして日本婦人としての特性を備へしめ且つ國民たるの資格を授け、例せば一旦緩急ありて義勇公に報じ遠く外征するの場合若くば萬里異郷に出でて商戰場裡に馳驅するに際し、良人をして内顧の憂なからしめ良人に代つてよく家政を齊へ得るの技倆を與へざるべからず。是れ吾人が執る所の女子教育上の主義方針の大體たるに過ぎずと雖も亦以て聊か吾人の微意の存する所を表するに足らん歟。

一 學校の組織程度及び教育法

吾人が創設せんと欲する日本女子大學校の組織は大略左の如くせんと欲す。

日本女子大學校



本表の明示する如く、吾人の一大主眼とする所は下幼稚園より上大學部に至る迄首尾の系統整頓せる教育制度を一枚内に設け、吾人が執る所の特殊の教育主義及び方法を實施し之を以て日本女子教育界の中心點たらしめんことを期するに在り。而して吾人が女子大學校を創設するや徒に帝國大學に韻頡せんとするが如き淺慮に出でたる妄策を企つるに非ざるなり。吾人は自ら固く信じ深く考ふる所あるに因るなり。熟々本邦女教の現状を見渡すに初等教育は云ふも更なり中等教育に於ては近時稍々進運の兆ありと雖も、遺憾少しとせず。高等教育に至ては殆と絶無とも云ふべく只

女子高等師範學校の一あるのみ。本邦の女子教育は此の程度にて完成とすべき乎、本邦の女子は此程度以上に發達進歩するの餘力はなき乎、資格はなき乎此の程度以上に教育するは無用の長物なる乎、有害の僻事なる乎。國民の一半たる男子は日に月に高等教育に進むも、そが伴侶たるべき女子は唯彈琴煎茶の道を知るのみにして家庭教育の法に暗く男子の事業に同情を表するを得ず、國家の進運に社會の改良に一臂の勞をだに盡すこと能はざるも國家は之れが爲めに損する所なき乎、社會は之れが爲に不利を感ぜざる乎。吾人は信ず。本邦女子の體力及び腦力は現行教育制度以上に教育せられるゝの資格餘裕ある者にして邦家の前途は亦實に高等教育ある女子を要するの切なることを。然るに反對論者あり。高等教育の、女子に有害無益なるを辨ずるも是れ未決の問題たるのみならず之れが反證の幾分は既に英米女子大學教育の成績に於て見るを得べきが如く、女子の體力腦力及び徳性は高等教育に因て害せられるゝもの非ずして却て増進發達せしむるを得べきものたるなり。唯大に戒心すべきは急激なる變更を教育制度上加へ若くば過度の高等教育を施すに在り。されば吾人は女子大學校を創設するも徧に本邦現時の女子の體力及び腦力に適合するの課程を編み順次漸進するの策を取り妄進の弊を避け、以て舊に現時の本邦女子に適合するの教育を施すのみならず、吾人は本邦の國體國情に適應する教育を授けんと欲す。彼の歐米直寫の女子教育は吾人の切に禁忌する所なり。加之吾人は高等教育を授けると同時に滿腔の精神を注ひて體育の事を顧み智育をして健康を害するの途を杜絶せんとを期す。而して體育の目的を達するの方便として普通教育中に於て生理・衛生・看病等の一般を授け女生をして自ら奮て自己の體育に注意し健康を養ふに至らしめんと欲す。又知育・體育は勿論技藝の教育に於ても吾人は個人の特性に應じて適切なる教育を授けん事を期す。前表中に示せる如く高等女學校の課目を必修と選修とに兩分したるも是れ此の主義の適用の一たるのみ。徳育に至りては云ふ迄もなく國情國體に従ひ武士風家庭の精英を標的となし採るべきの長は之を外方にも求め日本の女徳をして萬國の師表たらしめ、日本の家庭をして世界の模範たらしめんとの一

大抱負を懷ひて銳意之に従事し、殊に寄宿舎は數多の別戸寄宿舎を設け長幼相混し舎監を母となし長者は姉となり幼者は妹となり以て一家族の生活を營み寄宿舎を一族親類となし、歡樂悲哀を共にし裝飾・器具・洒掃・應對等凡て善良なる家庭に倣ひ各自順番に炊事を取り、以て女生徒をして開發的に女徳を修めしめんことを期す。

論者は云へり。女子高等教育は無用なるに非ざるも今は尙ほ其時に非ず。先づ初等女子教育を普及せしめ然る後徐に之に着手すべきのみと。然り。論者の言の如く初等女子教育普及して然る後高等女子教育に移るは正當の順序にして又望ましきことなれども、初等女子教育の普及たるや必ずしも初等女子教育のみに着眼したればとて進歩するものに非ざるなり。初等教育に力を盡すと同時に高等教育にも力を盡し上下兩端より着手して相呼應する時は、初等女子教育の普及は思はざるの間に刮目して視るべきの進歩を呈せんことを必せり。現に北米合衆國に於ては高等女子教育が深大の影響を初等女子教育に及ぼしその普及と發達とを助けたるは誣ゆべからざるの事實なりとす。吾人豈に初等女子教育を輕視する者ならんや。之に反して吾人は高等女子教育をしてそが普及と發達とを刺戟奮興せしめんと欲するなり。

一 教職員 吾人は教職員を選定するに當り殊に人物の點に重きを置かんことを期す。又教員には男女を併用せざるに非らざるも可成的女子を採用せん事を欲す。殊に舎監には有徳の婦人を聘してその監督に任じ、又場合に依ては教員をして一家族共に寄宿舎内に住居せしめ舎監を補佐して生徒の管理に助力し以て寄宿舎の感化をして有功善良ならしめんと欲す。

一 一般教制との關係 吾人か本校を設立するの趣旨たるや管に其の恩澤を高等女子教育に及ぼさんか爲めのみに非ず。本邦女子教育及び一般の普通教育をして普及發達せしめんとするにあれば其主旨を貫達せんか爲めに本校大學部に於ては官公立師範學校若くは高等女學校等の教員たり得べきものを養成するを以て一の任務とせざるべから

ず。實に教員の缺乏は天下の訴ふる所にして特に女教員の養成に至りては尤も急要を感ずる所なり。官公立の學校に在りては種々の關係する所ありて俄に此急需を充すに至ることを望むべからず。本校に在て此等の計畫を立てるは蓋し官公立學校に於て缺くる所のものを補充して聊か邦家に盡くす所あらんとするに在るなり。

一 資本金 熟々從來の私立學校なるものを觀察するに多くは基本財産なるもの不足するか若くは絶無なるが爲め、幸に一時の盛を呈するも一たび逆境に際會する時は衰退するの悲運を免れず。従て世人の信用を失するの止むを得ざるに至る者に一二にして足らざるなり。斯の如くんば何の面目ありてか復た寄附者に對せん。吾人は茲に大に鑒みる所あり。一旦設立せし以上は如何なる暴風怒濤の襲ふ所となるも巍然として兀立する巖牆の上に築き建てんか爲め、茲に基本財産金參拾萬圓以上を募集し、大凡拾萬圓をもて創立費に供し其の殘額を基本財産となし、そか利息を以て本校の維持に備へんと欲し寄附金拾萬圓以上に達したる後設立に着手すべし。而して之が設立に着手する迄は凡て之を確實なる銀行に供托して保管せしめんとす。且前記の目的を達するの曉には政府の保護監督をも受けんことを望む。

本校基礎の鞏固を得んか爲に收集したる寄附金は新民法の實施と共に法人設立の手續を了し法律保護の下に安固を得んことを期す。

一 評議員 本校財産の管理校長教授の任免等は評議員なるものを設け其の決議によりて之を處理せんと欲す。又評議員の資格權限寄附者の特權等其他凡て本校に關する通則の類は發起人會の議決に依て之を規定すべし。

吾人か日本女子大學校を設立するの趣旨・方法大略前述の如し。冀くは世の志士仁人、吾人微衷の存する所を諒察せられ奮つて贊翼の榮を賜はらんことを。頓首敬白。

(パンフレット 明治二十九年末から明治三十年の間)

(五) 本邦女子高等女子教育の程度

現今の女子高等普通教育は大に専門様の實用教育に偏して、智育を輕視し、之を第二位に置くが故に、女子の智育學識に至つては、甚不完全なるものあるを免れず、これ本邦將來のため吾人の聊て取らざる所也。否な、取るべからざる所也。然らば、如何にしてか、之を醫せん、曰く(第一)從前よりも一層多數の時間を智育のために消費し、學校に於ては重に智力と學力とを修養せしめ。(第二)には高等普通教育修養年限は高等小學卒業後四ヶ年となし、此間に於て十分生涯の基礎を築つかしむべし。吾人が高等女子教育の年限四ヶ年とするも、決して理由なきにあらざるなり。請ふ聊か之を述べしめよ、現時の高等女學校規程に従へば、高等小學卒業後二年若くは三年の短日月を高等教育のために、残すのみならず、女生は男生に必要な裁縫、茶の湯、料理、其の他家庭の實習、身の裝飾、等に多くの時間を消費するが故に、智育の程度、實に低く、殆ど小學校の區域内を脱する能はざる有様に、讀書力、學理研究力等、至て幼稚なれば、未だ何等の用にもたゞざるに、早既に廢學せしめ、一年中最も重要な教育時期を、空く無爲偷惰にして経過するの弊ありとす。故に今一層高等教育の實を擧げんと欲せば、其の年限を増加せざるを得ざるなり。然るに世の論者中之れに反對して云ふものあらん、曰く「若し女子教育年限を斯く延長する時は其の結婚期を失なひ晩婚に陥いるの恐れあり」と。是素より注意すべき事なれども、今日文明日新の世となりたるにも係らず、尙往古傳來の惡風なる早婚を善とし、娘にして二十に越れば、結婚期を失なひたりとて人も嘲り自らも悲む如きは、思はざるの甚しきもの也。實に今日の日本の風習は大に早婚に傾き未だ心身も成熟せず、智識も備らず、加之自ら獨立して、子女を養ふの力量全からざるに、早既に結婚するもの多きに居るに非ずや、是れ柔弱の國民を殖すの一原因

たらずして何ぞ。故に今日は却て早婚の弊を矯むるの必要こそあれ。普通高等教育年限は十七八歳迄に延ばせばとて、何ぞ晩婚の恐れありとせんや、殊に高等教育を受けたる女子は、自然高等教育を受けたる男子に嫁すべきもの多敷なるべし。然れば、女子の結婚期も、自然従前よりは後くるゝに至るは理の當然なり。是れ双方の志業成熟準備のため寧ろ賀すべきの事ならずや。

高等普通教育の女子に必要なは、既に吾人の論述せし所によりて明白なりと雖ども、四ヶ年の普通學科を卒へたればとて、未だ一藝にも、一能にも熟達せるには非らず。換言すれば未だ半出來の人間にして一人前の人たるにあらず、故に余は修業年限三ヶ年位の一種の大學を起し、最高等の教育を受くべき資格ある女子のために専門の業を得るの便を開く必要があるを信ずるもの也。已に數千人の高等女學校卒業生を出せる今日に於ては、少くとも、日本全國に於て、此の如き種類の大學一校を要すべし。故に先づ一の女子大學を關東に興し、漸次、關西に一校、九州に一校、都合三校の女子大學を興し、之を日本帝國に於る、女子教育の大中心たらしむるの必要あるべし。

然らば、本邦に於て起るべき大學とは、果して如何なるものなるべきや、素より今日の女子教育進歩の程度に適合すべきは勿論なりと雖ども、今試に其部門の主要を列舉すれば、左の如くなるも亦可ならん歟。

○家政部

世態學	家庭教育學	經濟學	家庭衛生學
看病學	家庭美術	心理學	小兒學
博物學	食品學	生理學	衛生學
			實習

○教育部

社會學	應用心理學	生理學	教育學
教育史	教育文學	教育制度	女子教育學
家庭教育	小兒學	家政學	文學實習

○文學部

邦文學	支那文學	英文學	歷史
哲學史	教育學	家政學	心理學
實地演習			

○音樂部

音樂	樂器	音樂論	音樂史
和文學	英文學		

事宜に應じては

○理化學部

○商業學部

○體操學部

○美術學部

等を加ふるも亦可なるへし。

〔女學雜誌〕四百三十八號 明治三十年三月

(六) 日本女子大學校設立に就て

今晚この會を催しましたのは、今度教育大會へ御出席になつた知名の教育家諸君の、女子教育に對する御高見を世の教育家諸君に御紹介し、同時に我々が設立に従事して居る、日本女子大學校の趣意精神をも諸君に御紹介申し、教育家諸君の御賛成を得たいと云ふ考へでございます。

この日本女子大學校の趣意を世に公にして以來、幸ひにも貴顯紳士、知名の教育家、學者、並に他の有力家諸氏の御賛成を得て、今日までに發起者、賛助員、賛成員に加盟せられた方は、大凡五百人ばかりに達して居ます。然るにこの日本女子大學校といふ名を公にした時に、一方では隨分世人を驚かし、又色々な疑惑を懷かしたことから、能く調査をなさずに攻撃非難をした少數の人々もありましたが、先づその名だけを公にしたことに據つて、世人が女子を教育せんければならないと幾分か感じた見え、地方及び東京邊にも影響して、それが爲に高等女子學校、その他の女學校の學生が幾分か増したと云ふ通知を、地方及び東京の教育者から受けたことがあります、果してその通りであるか否かは存じませんが、兎も角もこの日本女子大學校と云ふ名を公した故に、諸君の中にも色々な世評が傳はつて居ることであらうと考へますから、この名稱に就いて發起者の精神、學校の性質等を第一に説明する必要があらうと考へます。

我國に大學名稱をもつて居る學校は東京及び京都の兩帝國大學を初め、陸軍に陸軍大學校、海軍に海軍大學校がある、私立には慶應義塾大學部、同志社大學部、哲學館の大學科、又佛教派に大學林と云ふがある。支那には大學校を國子監と云ひ、英國では「ユニバーシティー」又は「コレツヂ」と申すが、此等は皆高等の教育場と云ふ意味の名稱

で、時と處とに依つて、程度に高低もあり、組織に幾分の相異がある。英語の「ユニバーシチー」又は「コレツヂ」と云ふは、日本で均しく大學と譯して居ますが、此の「コレツヂ」と云ふ名稱は、羅^ロ旬^旬語から來たもので、元來社會と云ふ様な意味を有つて居て、宗教や政治の團體に用ひたものですが、後に之を大學のことに用ふる様になつた。そこで英米殊に米國では、大學を「コレツヂ」と云ふて居ましたので、エール大學の如きも、數年前迄「コレツヂ」と稱へて居ました。それで此の兩者の區別の附け難い所もあります。處に依つては「ユバーシチーコレツヂ」と呼ぶ所もあります。

サテ斯様に大學にも色々の種類があり、様々の程度があります。又種々の組織があります。米國の如きも、大學の總數が三百七十許あつて、ハーバート大學やエール大學の如き高いのもあり、又随分低いものもあります。日本でもそうではありません。大學の二字を含んで居る學校でも、程度は随分違つて居る。然るに斯の如き相違のあることを念頭に浮べず、たゞ大學と云ふことを頭に置いて、この日本女子大學校と云ふ名前を聞くと、その大學の名に聯想して、東京大學或は京都大學と云ふことを思ひ出されるのでありませう。それが一つの疑惑の種になるかも知れないと思ひます。歐米には女子大學と云ふものがある。そこで又日本女子大學校と云ふ名を聞いて、歐米に在る女子大學と云ふものはあるまいかと云ふ感想が起るも無理ならぬ話である。併し歐米に在る女子大學は、歐米に於ける女子教育の進歩に伴うて出來てきたものである。又歐米の國狀及び歴史に據つて立てられたものである。デ米國に於てすらも女子大學、即ち女子に高等教育を授けるものに三つの種類がある。一つを「アンネツキス」と申し、男子の大學に附屬したものである。もう一つは「コーエデューケーション」と申して、男子と混合して教育をする大學である。第三は純然たる女子の大學である。亞米利加の女はどの大學へ入れても弊害はないが、充分に教育が出來るかと思ふことについては、亞米利加の教育者の話を聽くと、さうではない。「アンネツキス」大學へ入れるに適當して居るものもあり、

又「ローエデューケーション」の大學へ入れた方が好い成績を現はすこともある。そこは個人に従つてそれに應じた學校が社會に必要である。我國には亞米利加に在るやうな大學は必要でない。我國の女子教育の程度に適合した我國の社會の需用に應ずる高等教育を施す場所が要るのである。即ち女子大學に日本と云ふ冠詞を附け、下に校の字を加へて、この學校は亞米利加の大學ではない、歐羅巴ヨーロッパの大學ではない、又我國に在る男子の爲に設けたやふな大學でもない、未だ曾て世界にない一種特別無類の高等教育を施す學校である。即日本の國並に日本の女子に適當した高等教育を施す場所と云ふ意味からして、日本女子大學校と名稱を下した譯である。併し乍ら成るべく生徒自己の研究に據り、一般女子の缺點なる、殊に日本女子の缺點なる、智力を練磨し知識を開發せしむる點には力を盡し、所謂「リベラルエデューケーション」を與へ、成るべく我國婦人の知能の發達を促す精神である。併し斯様に申しても、女徳養成を第一主眼とするは勿論で、此點に誤解のない様に願ひます。さうしてこの日本女子大學校の組織と云ふものは、獨り高等教育ばかりではないので、これを日本女子大學校本校、及び日本女子大學校附屬學校の二つに別つのであります。この大學本校の方では、家政學部、文學部、教育學部、體育學部、音樂部、美術學部と云ふやうなものを順次必要に應じて設けて行かうと云ふ考へです。又附屬學校の方は、これを二ツに別けて、普通學部、専門學部。普通學校の方には幼稚園、小學校、高等女學校、次に専門學部と云ふのは簡易専門でございまして工藝部、商業部、看護婦學校の如きを設くる筈であります。この普通學校に於きましては、今日の高等學校と色々違ふ所もございしますが、先づこれを必修科と専修科との二ツに別けて、婦人に婦人として、最も必要なる、功力のある、役に立つ、即ち個人に適する教育を設けやうと云ふのでございます。

然るにこの大學、又は専門の教育を授けると申しますは、隨分誤解の種であります。私共は、我邦に獨身生活の女子を、輩出せしめん如き意は毫もありません。本科又は附屬部に於て、専門の教育を授くるも、其主たる目的は、矢張

賢母良妻を造るので、これ位の教育を與へざれば、到底新興日本の賢母良妻の職は、十分に出来ないと思ふのであります。處が、女子にも亦種々の境遇の人がありますから、此等特別の女子の爲にも道を開かんこと亦私共の目的であります。私共の精神を誤解されぬやう願ひます。

さて、かやうに述べた丈では、十分創立者の精神は分りませんまいが、詳細なる説明は、この僅の時間に盡せませぬから、唯その骨組の大體と、その精神とを述べたのであります。

然らば、どういう譯で、斯る組織の斯る性質の學校を設立する必要があるかと申しますと、これには種々の理由がありますが、今は唯其要領のみを説明しませう。第一は、今日現存の女子教育を、今少し高く、深く、狭くする、必要があるのです、高くするといつても、無暗に高くするのではない。今日の女子教育を考ふるに、成程高等女學校と名づくる學校も多くありますが、その科目は随分澤山で、完全なやうには見えませんが、實際調べて見ると、實に低いもので、殆んど小學教育である。専門教育は、之を低しいふよりも、皆無といふ方が近いかも知れぬ。其様に今日の女子教育は、低い幼稚なものですから、學校を卒業したからといつても、半熟や未熟の女子を養成するに過ぎない。故に其の期せし所の賢母良妻にならうと思つても、思ふた程には出来ない。それで女學生中、學校を卒業して失望する者が多く、且へ生意氣になるとか、お轉婆になるとかして、極不充的な者であります。素より此等は成熟して居ないからして、又女徳も治まらず、心の基礎たるものが出来て居ない。それで今日の女子教育は、眞個に成熟して賢母良妻となり、誠に婦人の職務を掌り得る程に達して居ないから、或は女子に高等教育を施せば、却て高慢になるとか、女徳を損するとかの説も出るのですが、この高慢我儘不遜などの惡徳の残り居るは、まだ教育の足らないに由るので、決して教育の罪ではない。實際歐米各國に於ける、今日の多くの婦人を見ても、眞個に賢母良妻たるものは、能く成熟して居る婦人である。教育の完備した婦人である、從來女子を教育することに付ては、世界中到る處初めの

間は、大に反對したのですが、その反對にも屈せずして、女子教育は益進んで來たので、如何に人間がこの世界進歩の大勢に逆らつても、勝つことは出来ないのである。男子が進むならば、婦人も矢張進まなければならぬ。是は人類發達の道筋であつて、この道筋に逆ふ者は、眞個の幸福繁榮を期することは出来ない。

次に深くするといふは、今日の女子教育は、實に皮相的に流れて、眞個に女子の心底から、深く教育するといふことが缺けて居る様です。即ち女子を器械的にし、玩弄物視し、小兒視する有様で、只目前に家政上の役に立つやうに、即ち實利實益と云ふ主義に偏して、眞個に圓滿なる完備なる婦人を養成する、即ち人を作るといふことが缺けて居る。そこで、私が深くすると云ふのは、眞に婦人の精神から教育して、即ち人を作る教育が必要であることを意味するので。

次に狭くするといふは、今日の教育は澤山の科目を注入するに偏して居るから、その授かつた智識を、能く自ら消化し、我骨とし、肉として、之を活用し得るまでに至らない。故に、今少し科目を減じて、眞個に生徒が消化し得る位に止めたい。又一つのことを専門に學びましたならば、眞個に之を消化して役に立つやうにする。即ち生半熟にならぬやう、一つのことと雖も、眞個にその學生をして之を學習せしむる必要を感じるのである。

第二は、女徳養成上の必要です。女子教育に女徳養成の最も重きを置くべきは、皆人の同意する處ですが、眞個に女徳を養ふべき機關は、大いに不完備である。女徳を養ふとは學校の書物のみでは出来ないもので、實に我等は善良なる家庭の望を屬するですが、今日の如き家庭の有様では、學校で如何に教育するも、更に功なしとは、教育家の嘆息する處である。昨日來諸君の御話に法令を以て、喫煙を禁ずるとか、或は飲酒を禁ずるとかいふこともありましたが、されば社會が善良完全なるに至らざれば、到底教育の完全なるを望むことは出来ないと感じられたからでせう。けれども煙草と酒とのみならず、芝居の如き、小説の如き、其の他社會教育の不完備なることにつき、教育家の嘆息すべ

きことは、數多ありまして、殊に女子教育に従事せらるゝ方は、一層深く感ぜらるゝことであらうと思ひます。故に今日眞個に女子教育をなさんと思はば、茲に健全なる寄宿舎を設くる必要があるのです。今日の女學校の寄宿舎の制度は、まだよくないと思ひます。今日世間の認めて居る女子教育の弊害即ち生意氣、我儘、高慢、親に事ふることを知らない、氣が附かない等いふことは、多くは女學校の寄宿舎で養つたのである。今日の寄宿舎は、少し言葉が酷い。か知らぬが、大底は監獄的、或は兵營的のやうなもので、家庭のやうでない。男子ならば、それでよいかも知れぬが、女子は男子とは違つて、色々女徳を備へなければならぬのですから、唯洗濯をするとか、縫物をするとか、煮爇をするとかいふ、外形ばかりでなく、眞に心の底へ好い家庭にある精神を吹込み寄宿舎へ歸ると、自分の家へ歸つたやうな心持になり、友人に交際し、人に應對する上に於ても、凡てよい家庭の空氣を寄宿舎に満たせなくては、眞個に女徳を養ふことは出来ない。之については、私も色々調査して考案もござりますが、詳しく今晚お話しすることは出来ませぬ。此度私が創立する學校には、何らかよき模範の寄宿舎を拵へて、完備なる寄宿舎制度を設け、それが廣く行はれるやうにしたいと思ふて居ることであります。

第三の必要は、一般教育の進歩、發達、普及の上からである。女子大學校を起すならば、未だ普及しない初等中等の教育の妨げになりはしないかといふ者もあり、又妨げにならないところが、未だ初等中等の教育すら普及發達しないのに、大學校などを起すは教育の順序を轉倒して居りはしないかと云ふ者もある。これは一應尤ものやうだが、矢張皮相の見で、一方から考へた説だ。物と云ふものは全體に相關係して居るから、上下左右から觀ねばならぬ。チヨツと考へて見ると、教育は順序のあるもので、初等教育から、中等教育、それから高等教育と進むのであると思はれる。成程一定の度迄は、初等中等の社會が進歩して居らねば、勿論高等教育は出来ない。然るに今日の初等教育にありては、學生百分の六十は全然で教育のない者で、實に初等教育も中等教育も不完備である。それで國民の上に智識

を平等に分配したいと云ふことは、誰も云ふことである。これは智識のみならず、富もその通りである。併しながら社會論者の云ふ如く、富の力が平等に分配されたと云つて、必ずしも圓滿なる社會といふことは出来ない。金満家を利用して、社會が大變發達することもある、それと同様に、少數の人であつても、随分高く進んだならば、その影響として一般の智識が高まることは、随分ある事實である。これは女子教育も男子教育も同一である。今日我國に行はれて居る幼稚園、小學校、並に中學校等の發達は、獨り初等教育のみがあつたからでない。中等教育が起つて初等教育も盛になり、帝國大學があつて中等教育が盛になり、即ち順次上から下へと相助けて、發達させた點もある。故に高等教育は必ずしも、初等中等の教育を妨ぐるものではない。

又第二の順序を轉倒して居りは志ないかと云ふ議論は言葉を換へて云へば、尙早論である。女の爲に高等教育の道を開くは、尙早い宜しくないと云ふ反對は、獨り我國ばかりではない。亞米利加でも、英吉利でも、獨逸でも、世界各國皆女子高等教育に反對したのである。尙早論を唱へたものである。亞米利加に於いて、今から二十年前に、スミスと云ふ婦人が、女の爲に大學校を開かうとした際に、亞米利加の輿論は、尙早い猫に小判のやうなものだと云つて反對した。併し女の爲に高等教育の道を開くべきであると深く信じて、その創立を助けたシイリーと云ふ人に、私が四五年前直接逢つて聞きましたのに、その人の云ふには、私は廿年前に今から二十年後に、若しもこの大學の教育を受けた婦人が四五人出たら、満足して一生女子教育の爲に働くと云つて居たと云ふことを申しましたが、今日はその學校の學生は八百人近くもあり、又卒業した女は數千人あります。二十年前は未だ早いと思つて居つたが、矢張り早いことはなかつたので、我國でもそれと事情を同じくして居ることが随分あらうと思ひます。又前に申した通り、段々社會の發達に伴うて、男子が進んで行くならば、矢張り女子も進まなければならぬことは、世界進歩の大勢である。人類發達の道筋である。それで今日まで力を盡して、女子教育に反對し、高等教育に反對したところの例へ

ば、亞米利加のハーヴァート大學の如きは、女子大學附屬として居たけれども、今日では一部分はこれを男子部と混合して、女子にも男子と同一の教授をすることになりました。又女子教育に就いて、世界中一ばん頑固なる國は、獨逸であります。獨逸でも此頃では女子の聽講生を入れることになつて居る。又女子教育に最も保守である、佛國フランスのキヤトツリク教、即ち天主教の如きも、女の爲に大學校を設けると云ふ有様になつて居て、矢張り我國も一度は、その世界の大勢に従つて、動かんければならない。人類進歩の道筋に伴つて行かなければならぬ時が來るに違ひない。そこで私は今日我國の女の爲に、成るべく進ませる所の道を開くことが必要であらうと思ふ。

第四、女教員養成上よりの必要、第五音楽上よりの必要、第六、體育上よりの必要、三段中略。

その他我國女子の爲に開拓すべき範圍は、種々あるも一々茲に論ずる時間がないから、この位で止めます。勿論日本女子大學校は、純粹なる教育の場所、純粹に日本の女子教育の發達普及を計うと云ふ目的である。發起者、贊成者の中に、政黨に關係して居る者もあれども、この學校は少しも政黨に關係はない。殊に宗教には少しも關係はない。佛敎家もあれば、神道家もある。耶蘇敎家もあれば、儒敎家もある。種々雑多の人々が女子教育の改善進歩と云ふ一點に一致して、共に骨を折つて成立たさうとして、力を盡して居る譯である。

(以下略す) 文責記者

(「女子のとも」第十三号) 明治三十年十二月

(七) 女子大學談

婦人と一般教育

成る程女子教育に就いての話ですか。さうですな、充分女子教育に就いて考へて居ることもあり、また女子大學のことに就いておはなしする事もありますが、併し、何分急がしい上に、此の間旅行から歸つて来たばかりの事ですから、纏めてお話しをすることは、一寸只今といふ譯に参りませんから、何卒貴方の方から御質問下さい。それに對する私の考へを一々おはなし申しますから。是れまでの訪問記は、皆そんな風ではありませんか、さうして下さいと、誠に都合がよろしいです。

とありければ、さらばとて、女子に高等の教育を授くることに就ては、世上尙ほ是れを非とするものあり、貴下が是に對する御意見や如何にと問ひまゐらす。

さうですね、まだ然様いふことを言つて居る人もあるやうですが、私は何うしても、一般教育を發達さして行くには、女子の教育を進めて行かなければならぬと思ひます。男子ばかりの教育が發達しても、女子の教育が進まなければ決して世は進歩しませぬ。今日の我が日本のやうな風では、殊に其の必要があります。一般の教育を發達して行くには、寧ろ此の婦人の教育が根本ではありませんか、今日の日本のやうな家庭では、迎も立派な教育は望まれません。女子の教育が進んで行つて、始めて一般教育の進歩を期することができるのではありませんか。一般教育を發達せしめて行くといふ上から、是非とも女子の教育を進めなければならぬと信じます。女子大學の設立されたのも、

此の主意と、教育方法を改めたいといふ考へからに外ならんのです。

米國でもですね、女子大學ができます際に、まだ早いとか、或は生意氣になるだらうとか、種々非難はありましたが、偕さて是れができて、其處から教育されて出た人が、決して其の論者が心配したやうには少しも無かつたものですから、世間では何にも言はなくなつてしまつたですね、日本などでは、米國人は皆飛び上りのやうに思つて、婦人に高等な教育を授けると、彼あれいふ風になると言ひますが、成る程、アングロサクソン人は、一體に快活な性情を以つて居りますが、併し、大學を出た婦人などは、決して飛び上りだといふ非難などを受けはしません、彼の生意氣だとか、飛び上りだとか言はれるのは、多くは皆教育を受け無い婦人なのです。

日本でも、日本の女子は、まだ大學を置く程發達して居無いといふ人もあるやうですが、併し、女子大學は、決して何れ位婦人教育が進んで來たから、それで是れを造つくらへるといふ風のものでは無いですね。下の發達して來るのを待つて、そして上を立てるといふやうな事をして居ては、迎ても教育の發達は望つまれせんよ。約つり、上の方からも段々下に及ぼして行かなければならんですね。下級ばかりで無い、上級下級とも相共に發達をして行かなければならんですね。

而して記者は、其の話中なる改めんとせらるゝ教育方法に就いて、更に問ひを發しぬ。氏は、其の髻を掀して門暢い辯を進められたり。

教育方法の改良

教育の方法を改めて行きたいと言ふのは、外でもありません。斯う言ふと、少しく是れまでの教育家を非難するやうにも當りますが、兎に角ですね、今までの教育方法といふものは、あまりに形式的で、あまりに記臆的で、皮相的

で、何うも、實質の缺乏といふ憂があつたですな。

たとへば、物を觀察する觀察力だとか、或は新らしいものを案出する工夫力だとか、または、反省力だとか、斯ういふ力を養ふことが、頗る薄かつたのです。約り、其の學び得た學問を、應用せしめるといふ事に就いては、甚だ遲鈍な教育方法だつたのですな。私の改めて行きたいと思ひますのは、此處なのです。

蒸氣にしたところで、電氣事業にした處で、また制度にした處で、日本人は、誠に是れを模倣することは巧であるけれども、物を工夫するといふことは、誠に拙いつたなですね。是れがと言ふと、要するに教育の方法が悪いからだと思ふのです。其の外、物を見て、是れを考察するやうな事にいたつても、日本人は全く其の力を缺いて居るですね。殊に婦人には、尙更是れらの力が乏しいと思ひますので、女子大學では、新らしい教育方法で、此缺乏して居る力を満たして行きたいと考へて居ます。

さて、それでは何ういふ風にして教育をして居るかと問はれましても、無論種々の設備はして居りますが、併し、此の學科は斯うして教へる、彼の學科は彼様いふ風にすると、一々それを此處で申し上げる譯には參りませんが、兎に角、すべての點に於いて教育の方法を改良して行きたい積りです。で、寄宿舎などにも、是れまで日本にはあまり無い新らしい設備で、生徒を入れる筈になつて居ります。

と此處に先づわが二問に對する答へは終りぬ。記者は更に其の膝をすゝめて、寄宿舎の新設備とや、そは如何なるものにて、如何に生徒に宿せしむるものにか請ふらば其の細を聞かんと更に第三の問ひを出だしぬ。

寄宿舎の新組織

寄宿舎の新らしい組織といふのは、其の組織を約り家族制にしたのです。……はい、さうです、是れも今お話し申

した通り、教育の方法を改めて行かうとする計畫の一つです。

何處の女學校を見ましても、寄宿舎といふものは、すべて、所謂寄宿舎的になつて居るですな。其處で、家政學が教へられてあつても、其處で、家事經濟の事を習つて居ても、其處で、料理の事など實地に稽古をして居ても、それが、所謂寄宿舎的であつて、學校を出てゝすな、眞個ほんごの社會に接して見ると、すつかり勝手が違つて、折角習つたものを、直ぐに應用して行くことができ無いといふ風であつたですな。

それと言ふのが、寄宿舎に澤山の人が居ても、それが、只だ單に學問の稽古をする學校の生徒として居たものからです、何うしても、眞個の家庭といふものに、密接な關係を持つことができ無かつたのです。高等師範學校へ行つて見ましても、部屋だとか器具だとかいふものは、誠に能く完備してありますが、其の常に居る部屋は、只だ一人居るのでは無いけれども、併し、普通の家のやうにはできて居ないですな、寄宿舎といふ特別なものができて居るです。そやから、さういふ處で住みなれて居るから、よし、一家の妻として應用すべき家政學や料理法を稽古しても、日常の境遇が斯ういふ風であるから、何うしても寄宿舎的になつてしまつて、實際の家でやる様には行かんです。

で、學校で習つたものをですな、直ぐ應用さすやうにしやうとすると、何うしても寄宿舎の組織を改めなければならんですな。家族制にしますのは、斯ういふ理由なのです。

……家族制ですか。それは、約り寄宿舎を一軒の家として、其の舎監が、父ともなり母ともなりまた姑ともなりしてですな、家政や、料理や、すべての家庭の事を、眞個の實地に就いて教へるのです。室の組織なども、實際社會の家庭とかはならないやうにいたす積りです。約り、寄宿舎に居る人をですな、一族として、それに何時も家族的の關係を持たして、實際社會へ出ても、直ぐに間に合ふやうにしたいと思ふのです。丁度、今建てゝ居ります寄宿舎は、二棟ですが、此の一棟を一つの家族として、互に親族といふやうな關係にして、何處までも、所謂寄宿舎的で無いや

うにしたいと思つて居ります。

今建て、居るのですか……夫れは、五百名を入れるだけの教室と、それから理科室と、寄宿舎が二棟とです。……はい、さうです、此の三月迄には全然できあがる筈です。もう大分でき上りました。御覽になるのですか。何時でもかまいません、大工にさう仰有つて御覽下さい。

更に記者は他の一問を發したり。そは、宗教と女子との事なり。曰く、近時宗教の問題世に喧しく、隨つて、女子と宗教、家庭と宗教の問題に就いても、彼是するものと多し生は事決して等閑に附し難く、我が社會に於いて一度は必ず大に研究すべきものたるを思ふ。先生の是れに對して懷かれつる意見や如何に。とこそ。

女子と宗教

は、あ成る程、さうでしたね、大分宗教に就いての問題は盛んに起つたやうですね。

とて先生は、口を開くに先だち、徐に組みたる腕を解きて、まづ前なる茶碗を取り給へり。

記者は更に曰へり、由來我が社會は、宗教を思ふこと強ちに淺しといふにあらざれど、是れに向つて拂へるの注意は、あまりに重からず、否明に輕かりしなり。

人として先天的に宗教を思ふの心存す。人は宗教なからざるべからず。殊に、婦人に於いて然るを感ず。

ある物を信ずる本性の信仰心に至りては、素より何人に差を見ずといへども、此の信仰の標的たるべき宗教は、其の形式に依つて今數派に分れたり。

宗教は迷信を産み又狂熱を産む。一家庭に二三の宗派を存するが故に、却つて家庭に平和の破綻を來すことあり。社會は、如何にして女子の宗教を勧め導き戒め將た且つ是れを如何にして取扱ふべき乎と。

先生は、一度解きたる腕をまた、緩かに組み合せつゝ、此方を見つめて、少しく其の膝をすゝめ、例の滑かなる辯を、此の問題の上に放ち給へり。

宗派は色々にわかれて居りまして、其の本は一つですが、併し、其の宗派の分れて居るのは、約り各人の満足する程度に於いて、各人に其の目的物を撰ぶからですね。時代に依つて、信仰の目的物が違ふこともありすし、また人に依つて、其の宗教心を満足せしめる目的物が違つて居ります。原始プロトタイプの時代には、たとへば山だとか、川だとかいふものを目的物として信仰して居た物もありますが、段々開化シキライズして來るに隨つて、人は最早さういふものを、信仰の目的物にしなくなつて來ました。併しながら、山にした處が、川にしたところが、是れを目的物として信仰して居る人の心持は、今日の佛教信者、今日の基督教信者と變りは無いです。各おのそれに依つて、其の宗教心を満足して居たのです。

私の見る處に依りますと、邪教邪宗にあらざる限りは、各人おの／＼其の心を満足せしめるに足る宗教を撰んで、是れに據つて居れば、それで可い事と考へるです。それで、段々其の人の頭腦が變つて行くにつれて、また其の撰ぶ宗教も、段々變つて行くのですからね。そして、各人各様に各信する處に依つて満足をして居れば、それで宗教の用はなして居りますし、また斯ういふ風に考へてさへ居れば、決して家庭の平和を破るやうな事もなからうと思ひます。

自分が基督教を信じて居るから、矢張り人にも壓おしすゝめて、是れを信じさせやうとしたり、また自分が佛教を信仰して居るから、人も矢張り然うしやうとして、強いて此れを信仰させやうとすると云ふやうな事は、誠に良くないことだと考へるです。約り、いくら骨を折つて説き伏せた處で、其の人が心から、それで満足しなければ、何にもない事ですからね。只だ自由に、其の人の爲すまゝにして置くのが、最も適當だらうと思ひます。……さうです

よ。然うして置けば、段々獨りでに變つて行くに違ひありません。そやから、私は何んな宗派でも、それに満足して、其の信仰を確くさへして居れば、それで可いと思ふですね。

記者は、此の問題に對する、先生が意のある處を諒し。而して、又更に他の一問を出したり。そは、大體に對する先生が教育の方針にありき。

自由と干渉

外訪記者の問に曰ふ、先生が教育手段の傾向や、所謂干渉的にあらずして、放任的……否自由的にあるが如し。知らず、先生の女子大學の上に施したまふ教育手段は、所謂自由的教育にありや。こひねがは希くば、其の意見の程を詳つまびらかにせむと。

自由的？ ……まあ然うですな。私の考は、約り引きしばつて置いて、或る思想を注入するとか、無理に壓へつけて教育をするとかいふ風では無くつて、すね、人の自由に任かして置いて、其のうちに教育して行きたいと思ふのです。まあ言はゞ自由的教育ですな。人に窮屈な思ひをさゝずしてそして教育して行きたいと思ふのです。

何うも、規則だとか何だとか言ふもので、無理に壓へつけた教育の方法は、成る程其の規則がある時、其の規則の下に立つて居る時は、それに隨つて規則の通りになつて居りますが、併し一旦外へ出て、頭に此の規則が無い場所へ行くと、忽ち其の態度が變つてしまつて、久しい間の骨折も、何の用をなさ無くなつてしまふですね。それがと言ふと、矢張り其の精神に教育をし無いで、其の精神が欲し無い形式ばかりの教育手段を取つたからです。ですから、無理に窮屈にして、規則づめで人を教育すると言ふ方針は、私の取ら無い處です。斯ういふ考ですから、女子大學にも、其の方針で行つて行きたいと思ひます。

外から壓へつけられつゝ教育されて居る人は、何うしても、自ら顧みるとか、自ら勵むとかいふ事をする暇が無いですな。然ういふ事を考へる暇が無くなつてしまふですね。是れで教育しては、思ふやうな効果を収めることはできませんと思ふです。自由的に教育をして貰ふな、何うしても、他の注人を待たずして、常に自ら顧み、自らおさへ、自ら勵み、自ら勉めるといふ風に教育をして行かなければなりません。私は、成るべく生徒に自由を與へて置いて——無論其の自由が過ぎてはなりません——然うして、心の教育を施したいと思ふのです。

此處に辯を終へて、先生は靜に手をうち、新らしく熱き茶を命じ給へり。最早辭し去らんとして、記者は尙ほ更に一問を呈しぬ。其は外にもあらず、先生が遊説したまへる地方の女子大學に對する同情如何となり。

さやう、私が初めて、女子大學創設の意見を發表しました時は、丁度明治廿九年で、其の時分は、尙ほ私の言ふ處に充分同情を傾けてくれる人が少なかつたですが、近頃になりましたは、何れの地方でも、相應に賛意を表して、さうです、尋常師範學校の卒業生や、高等女學校あたりの卒業生に思ひの外入學志願者が多いです。

早や歸るべき時に迫りたれば、外訪記者は此處に其の邸を辭したり。

歸來匆忙を極めて、親しく筆記するの注意を缺きし爲め、先生所説の意を盡さざりし個所少なからざるを、深く自ら思うて怠慢を悔ゆること極めて大なり。追記す。文字上の責任は一に記者にあり。

〔婦女新聞〕三十三號〜三十七號 明治三十三年十二月〜三十四年一月

